

苗箱数を削減するための厚播き及び疎植栽培技術

—収量と玄米品質を低下させないポイント—

はじめに

- 本県の水稲の作型は早期栽培であり、3～4月の気温が低い時期に育苗・移植を行います。このような環境条件でも高い収量や玄米品質を確保するためには、各品種ともに適正な一箱当たり播種量を乾粃130～150gとして健苗を育成し、この苗を栽植密度55～60株/坪（株間18～20cm）で移植して初期生育を確保する必要があります。
- 育苗施設の面積が限られている場合、**一箱当たり播種量を増やして一箱当たりの苗本数を多くすること（以下、厚播き）**や、**移植時に株間を広げる疎植栽培**を導入すると苗箱数を削減できます。
- しかし、通常とは異なる栽培技術のため、厚播き、疎植栽培ともに育苗や移植時の注意点が多くあります。また、両方を組み合わせて苗箱数の削減を急激に進めると収量や玄米品質が低下するので、**いずれか一方を選択**して苗箱数の削減を図ることを基本とします。
- 収量や玄米品質を低下させないためには、品種や移植時期によりどちらを選択したら良いかが異なります。その選び方と、実施する際の注意点を解説します。

品種や栽培条件により、

厚播き、疎植栽培のいずれかを選択する

使用苗箱数の目安
(箱/10a)

18～
20箱

慣行の播種量（乾粃130～150g/箱）
慣行の栽植密度（55～60株/坪＝株間18～20cm）

ふさおとめ

ふさこがね

コシヒカリ

5月移植

4月中・下旬移植

厚播き

(乾粃180～
200g/箱)

対応田植え機のみ

高密度播種

(乾粃220～300g/箱)
※機種により異なる

疎植

(48株/坪
＝株間23cm)

地力の高い壤質土、
粘質土の圃場のみ

疎植

(37株/坪、
＝株間30cm)

12～
14箱

10～
11箱

×

植付本数は削減しない（苗箱数をこれ以下に削減すると、穂数の不足により収量や玄米品質が低下するため）

厚播きの注意点（通常型の田植え機で苗掻き取り量を最小限に設定） 一箱当たりの播種量 (g)

- 通常型の田植え機では、株当たり植付本数を5本程度とすることができる播種量の上限は、一箱当たり乾粃180～200gである。なお、高密度播種苗対応型の田植え機では播種量をより多く高密度播種（乾粃220～300g）できる。

	乾 粃	催芽粃
慣行播種	130～150	165～190
厚播き	180～200	230～255
高密度播種	220～300	280～380

- 通常型の田植え機での上限量を播種（厚播き）した苗を移植する場合、横送り回数を多い方に設定した上で、苗掻き取り本数を最少として一株当たり植付本数が過剰にならないようにする。
- 苗質は慣行の播種量と比較して細く軟弱になるため、移植時に苗が折れたり根元がばらけないように丁寧に移植する。

（育苗の注意点）

- 病害が発生しやすいため、種子消毒、床土消毒を適切に行い、かん水過多としない。
- 根がらみが良いため、播種後14日頃（育苗器使用、4月下旬移植の場合）から移植可能であり、移植に適するマット強度に達するまでの日数が慣行の播種量の苗よりやや早い。
- 苗の黄化が早いので、播種後30日より前に移植を終えるようにする。移植期間が長くなる場合には播種を複数回に分ける等、黄化が進んだ苗を使用しないように作業計画を立てる。

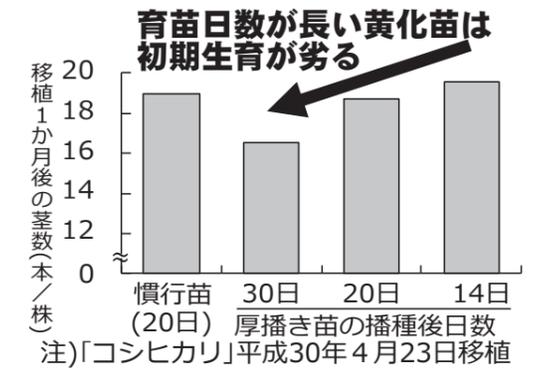


慣行播種量
(乾粃130g)



厚播き
(乾粃200g)

播種時の種子粃の密度（品種は「コシヒカリ」）



疎植栽培の注意点（栽植密度48株/坪以下に設定できる田植え機で対応）

- 各品種とも栽植密度を低くすると穂数が減少するため、慣行の収量の確保が難しくなる。特に、「ふさおとめ」では減収しやすいため疎植栽培には向かない。
- 「ふさこがね」及び「コシヒカリ」では、地力が県内の平均的から高い圃場で、かつ、4月に移植する場合（分けつ期間を長く茎数を確保しやすい）に疎植栽培が可能である。
- 疎植栽培を行う場合の窒素施肥量は、土性ごとに策定されている施肥基準量を基本とし、増加も削減もしない。
- 移植時には植付本数の削減は絶対に行わず一株当たり4～6本とし、茎数の不足を補う。
- 移植後の水深や除草剤散布時期に留意し、初期生育を促進するように努める。
- 必要な茎数（「ふさこがね」では360本/m²、「コシヒカリ」では320本/m²）を確保したら、田面が固まるまで中干しを確実に行う。特に「コシヒカリ」では中干しが不徹底だと分けつが止まらず過繁茂となり、倒伏や玄米品質の低下を招くので中干しを徹底する。

共通

- 厚播き、疎植栽培のいずれの場合も、移植精度が低下することで初期生育が多少なりとも不良になる。その影響を最小限にとどめるよう早期の移植は避けるとともに、田面の均平に注意し、除草剤は活着を確認してから散布する等、丁寧な栽培管理を行う。